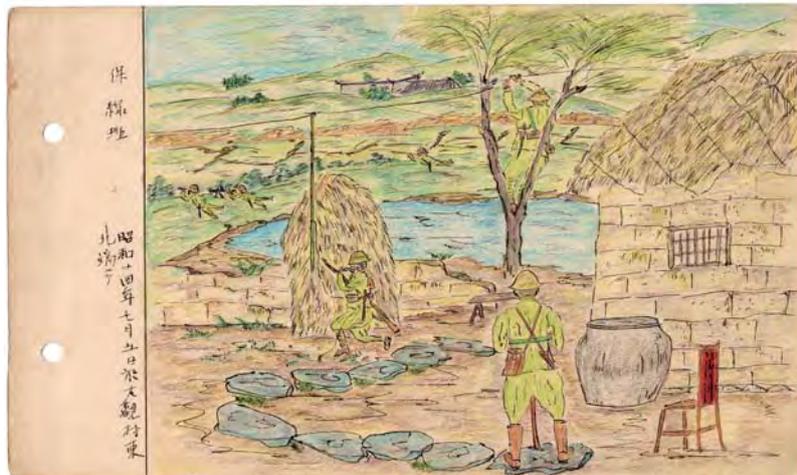


立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.26-2 (通巻 75号) 2018.11.30 発行



スケッチ：保線班（外山重男画）
P11 事業報告 ミニ企画展示に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの収蔵品 72	ワンピース
02	巻頭つれづれ	算数平和学？
04	着任挨拶	就任あいさつに寄せて
05	平和教育研究	研究プロジェクト 「自衛隊基地の地域史・社会史プロジェクト」
06		土曜講座 「平和創造に向けたスポーツの役割とは何か： オリンピック、パラリンピックの意義を考える」
08	運営委員リレー連載	記憶のうまれるとき、語りがつむがれるところ
10	ミュージアムおすすめの一冊	『大地の子』『二つの祖国』
11	事業報告	

ワンピース

このワンピースは、1945（昭和20）年8月6日に広島で被爆した少女の資料として当館で保存されてきました。上半身は布が重なるボタン部分と脇や袖の一部以外は焼け落ち、着ていた人物が上半身に深刻な火傷を負ったことが想像されます。残っているスカート部分はハサミのようなもので切り開かれており、火傷の治療に使われた亜鉛華と思われる白い付着物も見られます。スカート部分の長さは約50cm。身長150cm程度の少女が着たら、膝上10cmくらいの丈になるでしょう。洋裁用の型紙を用いて手縫いで作られた模様で、ウエストがしぼられ、スカートが少し膨らんだシルエットです。

持ち主は、雑魚場町の建物疎開作業に動員されている時に被爆した広島女学院1年生の木村愛子さんとされてきました。愛子さんは、宇品の救護所に収容され家族の迎えを待ちながら、8月12日に亡くなりました。家族は原爆投下直後から愛子さんを捜し求め、居場所を知るとすぐに駆けつけましたが、数時間違いで、愛子さんは亡くなっていました。この時の状況や、原爆投下直後の広島市内の様子、家族の被災の様子などを、愛子さんの父は後に、『愛子 原爆悲記』と題した手記にまとめています。遺族は1968（昭和43）年に広島県動員学徒犠牲者の会を通じて、複数の愛子さんの遺品とこの手記を「戦没学徒記念若人の広場」に寄贈しました。そこにはワンピースも含まれていました。そして、2004（平成16）年に「若人の広場」の資料が当館に移管されたことで、このワンピースも当館に収蔵されることとなりました。原爆がもたらした被害が伝わりやすい資料であることや、父の手記を通して愛子さんの人柄や生活の様子、そして被爆による死の状況が伝えられているため、当館でもこれまで3回の特別展に出品してきました。

しかし、2018年度秋季特別展「8月6日」でこのワンピースを展示することになり、改めて遺族にお話を伺ったところ、このワンピースは別人のものであることがわかりました。姉の礼子さんが晩年、このワンピースは本当は愛子さんのものではないと明かしていたのです。

広島では、8月6日から2週間で3万人以上が亡くなりました。救護所でも次々に亡くなる人々を茶毘に付すのも追いつかず、一時遺体が横穴に投げ込まれることもありました。愛子さん遺族も遺体を連れ帰ることはできませんでした。そして混乱の中、遺骨は行方不明になりました。両親は多数の遺体が葬られた似島に愛子さんも眠るものと思い、似島で開かれた法要にも参列しました。ところが8年後、愛子さんの遺骨がみづかり



ワンピース 105.0cm × 45.5cm

ました。引き取り手の無い遺骨として寺に預けられていたのです。家族はすぐに遺骨を引き取りました。ここにワンピースがついてきたものと思われます。愛子さんが亡くなってから遺族が遺骨を手にするまでのどこかの段階で、別人の遺品が添えられたのでしょうか。そして、愛子さんの遺品が寄贈された際に、このワンピースも一緒に渡されたものと思われます。

愛子さんを失った両親は戦後、学校の慰霊祭や、多くの動員学徒が運ばれて亡くなった似島の法要に参加し、父の手記も出版されました。戦後に生まれた礼子さんの子供達にも、原爆で亡くなった愛子さんの存在は伝えられていました。しかし、愛子さんの死の状況や、原爆投下直後の体験が語られることはなく、子供達は手記を読んで初めて具体的なことを知ったと言います。礼子さんの長女は、子供の頃はわからなかったものの、ご自身も人生の中で様々なことを経験した現在は、愛子さんの両親や姉が愛子さんを失った痛烈な寂しさを抱え続けていたことがわかると語られました。また、木村家では戦後、夏になると愛子さんの妹や礼子さんの子供達を連れて宇品に行っていました。子供達にとっては夏の海水浴でしたが、愛子さんの両親は、遺骨が戻らない愛子さんが葬られていると思われた似島を臨み、対岸から愛子さんに会うために出かけていたのではないかと、ということです。

（学芸員 兼清順子）

巻頭 つれづれ

算数平和学？

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

最近著『核兵器禁止条約を使いこなす』のこと

暑い盛りの2018年8月6日、第73回目の広島原爆投下の日に、安齋育郎・林田光弘・木村朗著『核兵器禁止条約を使いこなす』（かもがわ出版）を刊行しました。本を出版しても誰も読まれなければ何にもなりませんから、私は、普及して多くの人々の思考を刺激し、行動に結びつけて貰うことこそが大切だと思い、本を出版したら「行商人」になることにしています。

発行日の8月6日には広島で開催された原水爆禁止世界大会の会場で売り子に立ち、100冊を完売しました。その後も、大阪私学助成の会「夏の一日子習会」、第14回まほろば平和音楽祭、第1回東大阪福祉祭、立命館大学アカデミックセンター「おとなの学び舎」第3回講座、第17回平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会、第52回原爆忌全国俳句大会、京都まつり2018などでも普及に努めました。出版社にしてみれば、結構いい著者です（笑）。

ところで、せっかく著者が売り子に立つのですから、普通は「サインセール」になります。私は和紙に「前へ前へ 安齋育郎 二〇一八年八月六日刊」と筆書きして押印したものを用意し、求めに応じて買い手のお名前を書き加えました。最近の本は幾分「お高め感」があるのですが、著者のサインセールぐらいで売れるのかどうか。

そこで、大阪私学助成の会では一計を案じて「トンデモ・セール」を試みました。

本の販売価格に関する考察!?

この本の価格は「本体価格1600円」＋「消費税8%（ $1600 \times 0.08 = 128$ 円）＝1728円です。173頁の本で1728円ですから「1頁10円」。まあ、今どきの本としては標準的です。しかし、それなりの金額ではありますから、この金額のもつ特別な意味についてアピールすることにしました。

数学好きの安齋は1728円という数字を見てビビッ！とききます。

$$1728 = 12^3 = 10^3 + 9^3 - 1^3$$

上式の各辺に $1^3 (= 1)$ を加えると、

$$1729 = 12^3 + 1^3 = 10^3 + 9^3$$

実は、1729はこのように3乗数の和として2通りに書ける最小の自然数なのです。だからどうした？

これには背景に面白い物語があります。

インドにシュリニヴァーサ・ラマヌジャン（1887～1920）という数学者がいました。イギリス留学中に病気で入院したのですが、見舞いに訪れた恩師のゴッドfrey・ハロルド・ハーディ教授が、「いま乗ってきたタクシーのナンバーは1729で、大して特徴のない数だったよ」と言ったのに対し、ラマヌジャンは、「先生、それは違います。1729は、 $10^3 + 9^3$ 、 $12^3 + 1^3$ と3乗数の和として2通りに書ける最小の整数です」と即座に答えたというのです。ありゃま。天才というのは、いるものですね。それにしても、数学者の病氣見舞いの会話って、こんなんですかね？

とにかくこの逸話により、1729は「タクシー数」と呼ばれるようになりました。

私は、大阪私学助成の会の聴衆の皆さんに、「だからこの本を定価でお買い求め頂けば、それはそれで『エピソードつきの価値』があります」と多少（いや、かなり）「押しつけがましく」言ったのですが、会場からは笑いが返ってきました。失笑か苦笑か嘲笑か。先の国連総会でアメリカのトランプ大統領が「私の政権はこの2年で過去のどの政権よりも多くのことを成し遂げた」と自画自賛した時、会場から「失笑」を受けました。大統領は「Oh, I didn't expect that.」（えっ！そんな反応は期待してなかったなあ）と言って自らも「苦笑」したらしいですね。私の「定価販売意義づけ押し売り作戦」に対する笑いは、もっと温かいものだったと勝手に思っていますが、結局私は「安齋育郎喜寿記念一筆箋」をおまけにつけて完売したのでした。微苦笑。

数字で考えるということ

漫画家の植田まさしさんの『かりあげクン』という作品に、こんな話があります（植田まさし『かりあげクンDX』〈双葉社〉2018年）。かりあげクンはちょっとチャランポランなおと

ぼけサラリーマンですが、ある日課長に「外回りにいってきます」と告げて会社を出ます。課長は新人社員に「いっしょにいったいこの漫画の落ちは何でしょうか？」

実は、かりあげクンが新人を伴って行った先は「山手線の外回り」。「半分ぐらいは山手線の外回りで寝るのよ」と新人に「営業活動のノウハウ」を教えます。新人いわく、「あ、勉強になります」。大丈夫かなあ、この会社？

この漫画の眼目は「外回り」という言葉の綾ですが、通常、①家の外周、②会社の取引先を回る営業活動、③環状線の外側の路線、の3つの意味で使われます。この漫画は②と③の意図的な混同をテーマにしていますが、サボリ時間稼ぎという意味では別に「内回り」の環状線でも構いません。

では、「外回り」は「内回り」よりもどれくらい長いのでしょうか？

ある人が2018年4月現在での東京の山手線の運行時間を調べたところ、一周に要する時間は最短で62分、最長で69分でしたが、ちょっと意外なことに、「内回り」の平均は63分49秒、「外回り」の平均は63分43秒だったそうで、「外回り」の方が時間がすこし短いのです。山手線は東西約6.5km、南北約12kmの楕円形に近く、1周は34.5km程です。「外回り」は「内回り」よりも線路が平均して5mばかり外側を回っているので、その分長い距離を走っていることにはなりますが、計算してみると1周しても30m程しか違いません。ラッシュ時の乗り降りの時間調整などを考えると、「内回り」も「外回り」も実質的な差はないのですね。

では、これを「地球に鉢巻をする問題」に置き換えてみましょう。

地表面にぴったりつけて地球に鉢巻をするのと、地表面から5mの隙間をつくって地球を一周する鉢巻をするのとでは、どれくらいの差が出るのでしょうか？何しろ山手線とは違って一周4万キロもある地球のことですから、上空5mとはいえ「ぴったり鉢巻」と「5m上空鉢巻」とではかなりの差が出るような気がします。計算してみると違いは山手線の場合と同じく約30mに過ぎません。中学校で学習したところによると、半径rの円の周囲の長さは $2\pi r$ （ π は円周率 ≈ 3.14 ）ですから、地球の半径をR(m)とすると「5m上空鉢巻」と「ぴったり鉢巻」の差は、 $2\pi(R+5) - 2\pi R = 2\pi \times 5 = 31.4$ mとなります。要するに、半径5mの円周分しか変わらないのです。

全人類の肉団子という話

「感覚でとらえること」と「数量的に把握すること」とは、問題の性格に応じてどちらも有効性をもっていますね。

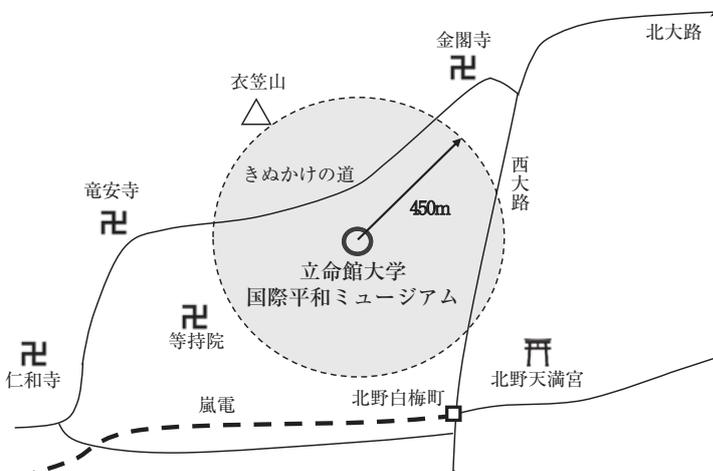
現代平和学の分野では、平和は「戦争のない状態」ではなく

「暴力のない状態」だという理解が広まりつつありますが、この場合の暴力とは、戦争のような「直接的暴力」だけでなく、飢餓・貧困・社会的差別・人権抑圧・環境破壊・医療や教育や福祉の遅れといった社会のありように深く根差した「構造的暴力」も含まれると理解されています。私はこの「構造的暴力」を説明する時、よく「全人類の肉団子」という変わった話をします。それは、76億人の全人類をひと塊にして肉団子を作ったら、その半径はどれくらいになるかというちょっと危ない譬え話です。

これまた中学校で学習した公式によると、半径rの球の体積は $\frac{4\pi r^3}{3}$ です。「身の上に心配あるゆえに参上仕り候」なんて覚えませんでしたか？

仮に人類一人当たりの平均体重を50kgとすると、全人類の体重はその76億倍（ $= 50 \times 7.6 \times 10^9 \text{ kg} = 3.8 \times 10^8 \text{ トン}$ ）です。人間は水と大体同じ密度で「1トン $\approx 1 \text{ m}^3$ 」ですから、 $\frac{4\pi r^3}{3} = 3.8 \times 10^8$ と置いて全人類の肉団子の半径r(m)を求めると、 $r = (3.8 \times 10^8 \times 3/4\pi)^{1/3} = 450 \text{ m}$ となります（計算はお任せ下さい！）。つまり、人類という生命体は「直径1kmにも満たない有機物の塊に過ぎない」とも考えられるのです。

地図を見て下さい。立命館大学国際平和ミュージアムの近くには有名な神社仏閣がたくさんありますが、半径450mの円を描いても北野天満宮や金閣寺などの最寄りの社寺にも届きません。この円の大きさの球の中に全人類76億人が入ってしまうのです。地球の半径はこの1万4000倍もあります。豊かな水惑星・地球がこの小さな肉団子を養えない筈はありません。それにもかかわらず飢え死にする人が年間約1000万人（3秒に1人）もいるのは、この世界が人の生存を平等に保証できない構造的暴力性に満ちているからに外ならないでしょう。それは「戦争ではなくても平和とは言えない」—そう現代平和学は考えています。



着任挨拶

就任あいさつに 寄せて



中本 悟

(国際平和ミュージアム副館長 / 経済学部教授)

このたび、副館長に就任した中本 悟です。最初の執行部会議で、ミュージアムの展示内容の大幅な見直しと内装の大規模なリノベーションの実行計画を策定すると聞いて、その職責を感じているところです。また、このミュージアムには学外からの見学者も多く、学校の生徒の平和学習や同種のミュージアムの交流拠点ともなっており、本学が大きな社会貢献をしていることを知りました。こんにち大学のミュージアムにはさまざまなものがあります。そのなかにあって、「平和と民主主義」を教学理念として掲げる本学にふさわしいユニークで、設置理念が明確なミュージアムを創った先人の先見性に敬意を表するほかありません。私たちには、このミュージアムを活用しその価値を高めることが求められています。

とはいえ残念ながら、BKC(びわこ・くさつキャンパス)の学生や教員にとってもこのミュージアムは縁遠い存在でしょう。「平和と民主主義」の教学理念の具体化として、もっと多くの学生が参加できるようになれば、と考えております。

さて、私の研究対象は現代アメリカ経済です。そこで、ご挨拶の機会を利用させていただいて、平和と民主主義にかかわるデータを二つ提示します。一つは軍事支出です。平和の対極は国家主導の国際的武力紛争、つまりは戦争であり、いったん戦争が起きれば誰もそれから逃れることはできなくなります。この戦争に備えたり、戦力強化に使われるのが国の軍事支出です。図は、アメリカの財政支出の二つの筆頭項目である軍事支出と社会保障費(高齢者の公的年金や医療保険など)を示したものです。2017年ではこれら二つの費目で、支出全体の75%を占めています。アメリカのこの軍事支出額は世界でも突出しており、第2位の中国のその3倍に達しています。財政支出は「国の顔」です。アメリカは福祉国家と軍事国家という二つの顔をもっているのです。

国の軍事費に依存する軍需産業は、やがて軍部や軍需産業関係の政治家と緊密な結合を築き政治勢力として大きくなります。このトライアングル構造は、アメリカでは第2次大戦中に成立し、軍産複合体と言われています。軍人出身で大統領になった共和党のドワイト・D・アイゼンハワーは、1961年にこの軍産複合体の台頭に対して警鐘を鳴らしたのです。

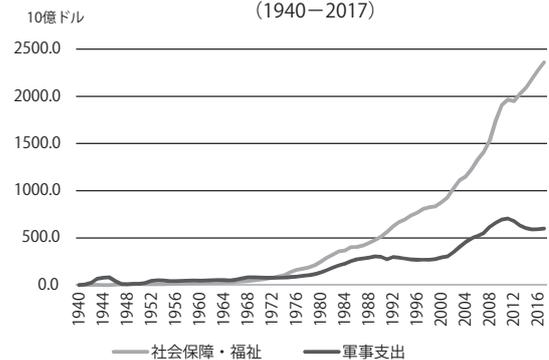
政治家と軍需産業とを結びつける最大の手段は、政治献金です。アメリカでは企業がPAC(政治活動委員会)を作り、それが企業幹部たちから寄付を募って、それが政治家に対する政治献金となるのです。いま一つのルートは、ロビーストです。ワシントンには、企業や業界から出される資金を使って、立法工作活動を行う人たち(ロビースト)が1万人以上も登録されています。彼らは引退した議員やあるいは大統領指名による政府高官だった者、あるいはビジネス界の幹部などで、政権が変わるたびに入れ替わり、それは「回転ドア」と呼ばれています。

この「回転ドア」の動力は、これらのロビー活動団体に入る莫大な資金です。業界団体は、これらのロビーストを通じて政治家や政党、大統領候補者に対して業界に有利な立法や政策の実行を頼むのです。このような金が民主、共和の両党派に流れており、金が政治を買い、民主主義が飲み込まれています。1960年代には労働団体や公益目的のロビー活動が強かったのですが、現在は金融業界、製薬業界、医療業界、不動産業界などのビジネス界の資金力は圧倒的に大きくなっています。

軍需産業は、表に見るように活発なロビー活動を行っており、2017年ではボーイング、ロッキード・マーチン、ノースロップ・グラマンという3大軍需企業が合計で4600万ドルのロビー活動費を投じており、これら3社だけで全米で第3位の規模になります。アイゼンハワーの警告にもかかわらず、軍産複合体は大きくなっています。

平和は民主主義を基盤として成り立つのであり、金が政治を買う、まして金が国家安全保障政策を買うような事態は平和を脅かすものと言わねばならないでしょう。

図 アメリカ連邦政府の軍事支出と社会保障費支出 (1940-2017)



出所) Office of Management and Budget.

表 ロビー活動の案件とその件数 (2017年)

案件	件数
連邦政府予算・歳出割り当て	3,109
税	2,598
医療・保険	2,126
運輸	1,393
国防	1,271
貿易	1,028
エネルギー・天然資源	1,008
高齢者医療保険・低所得者医療扶助	995
環境・環境保護法	941
教育	927

出所) Center for Responsive Politics

研究プロジェクト 「自衛隊基地の地域史・社会史 プロジェクト」

番匠健一

(国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー /
衣笠総合研究機構生存学研究センター客員協力研究員)

これまでの日本における軍隊研究は大きく分けて二つの潮流がありました。一つは、憲法学・国際政治学を中心とした自衛隊の位置づけ・日米地位協定・安保条約締結などに関わる研究であり、もう一つは沖縄の米軍基地にかかわる部厚い研究が同時代の軍隊のリアリティを大きく規定してきました。戦後史においては、第二次大戦後の日本占領期に焦点を当てた研究が増加し、朝鮮戦争に関わる再軍備や米軍基地の形成に関わるテーマが新しい領域を形成しつつあります。本プロジェクトの目的は、近代史や占領期の軍隊研究を参照しつつ、変わりつつある自衛隊の現在から、地域社会と軍隊の関係性を考えることにあります。日本帝国の基地、進駐軍の基地、そして朝鮮戦争後の再軍備以降の自衛隊の基地という歴史的連続性の延長線上において、自衛隊は地域社会に存在し住民と交流を進めるも、軍事行動を遂行する「軍隊」としての役割は不可視化され続けてきました。

ベトナム戦争にともなう各地の反軍・反基地運動が大きくなるとなる時代においては自衛隊基地と米軍基地はともに反基地運動の対象でしたが、以降、沖縄・岩国・横須賀など米軍基地が「基地問題」の領域の中心を形成する一方、自衛隊基地は北海道の恵庭や長沼など憲

法問題として取り上げられたものを除き問題化されることはわずかでした。本プロジェクトの目標は、基地を抱える地域社会の歴史経験を丁寧にひろい結び合わせていくことで、「米軍基地」と「自衛隊基地」の問題領域が切り分けられる政治をあきらかにしていくことです。

本プロジェクトの第1回研究会では、中島弘二先生(金沢大学)に「大分県日出生台における軍事演習反対運動の展開—生活世界からの抵抗—」という報告をしていただきました。米軍や自衛隊に対する補償や抵抗運動と地域住民の歴史を踏まえながら、日出生台の畜産農家やNPOと長年かかわり続けてこられた先生ならではのひとと自然と軍隊の関係性をお話しいただきました。

(http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/18/180921/news_190921.html)

第2回研究会は、1月後半に松田ヒロ子先生(神戸学院大学)に「1950-60年代の自衛隊と地域社会」(仮)という報告をしていただく予定です。松田氏は、移民や軍事をテーマに、沖縄、台湾、北海道など東アジアの地域を越境的に研究されており、研究会を盛り上げてくれることは間違いないでしょう。

またプロジェクトメンバーによる調査も行っています。大野光明氏(滋賀県立大学)はXバンドレーダーの設置が問題となっている京丹後宇川地区とかかわりながら、自衛隊・米軍双方の基地と地域社会の問題に取り組んでいます。また番匠健一は、北海道の別海町に位置する矢白別軍事演習場にかかわりながら、酪農と漁業そして軍事基地を切り離さずに地域社会の問題に取り組んでいます。プロジェクトメンバーの研究成果については、『立命館平和研究—立命館大学国際平和ミュージアム紀要—』やホームページにおいて報告していく予定です。



矢白別平和盆踊り



矢白別 平和の家

2018年8月土曜講座

平和創造に向けたスポーツの役割とは何か：オリンピック、パラリンピックの意義を考える

8月5日は、「パラリンピックと障害者スポーツ：傷痍軍人のリハビリテーションを起源とするパラリンピックから障害者の福祉を紐解く」について、金山千広産業社会学部教授が担当されました。講座は、①パラリンピックの基礎知識、②パラリンピックと日本の障害者スポーツの発展、③スポーツを通じたインクルーシブ社会の創出の3つの観点から話題提供がなされました。

日本は2回のパラリンピック夏季大会を開催する唯一の国です。しかしながら、パラリンピックが第2次世界大戦後に傷痍軍人のリハビリからスタートしたことは、あまり知られていません。また、1964年の「東京パラリンピック」を契機として、今日の「全国障害者スポーツ大会」が開催されるようになったことや「フェスピック」を開催してアジア諸国に障害者スポーツを普及してきたこともほとんど知られていません。日本での障害者スポーツは、導入時より、競技性よりも機能回復を目指す取り組みとして位置づけられてきました。そのため当初から車いすを使用する中途障害者のみならず、対象者のすそ野を広げて、すべての身体障害を含めた展開がなされました。現在も日本からパラリンピックに出場しているのは、先天的な障害、もしくは事故などで障害を負った人たちですが、海外では、戦場から帰還した負傷兵も数多く参加しています。したがって、講座で



講演する金山千広教授



講演の様子

は、以前は生涯を通して1度だけの参加とされていた「身障国体」等の具体例をあげて、社会啓発を目指す「福祉」として位置付けられてきた日本の障害者スポーツの特徴が語られました。

近年では、パラリンピックの高度化、競技化への流れを受けて、障害者スポーツは、厚労省から文科省に移管され、スポーツ庁による一元化推進体制に組み込まれています。パラリンピックの開催は、障害者への社会的関心を引き出しつつ、当事者、競技団体、地域スポーツを推進する諸組織へ多大な影響をもたらします。2017年に策定された、第2期スポーツ基本計画もまた、スポーツを通じたインクルーシブ社会の創出を目指しています。

この点について詳細に述べますと、障害のある人のスポーツ参加について、①適応できない人に配慮がなされない場合は、スポーツに参加する権利をはく奪した「エクスクルージョン（排除）」になること。また、②「機会」が与えられても配慮がなされない状態は「ダンピング（投げ込み）」になること。③適応困難な人を対象とした合理的配慮は「バリアフリー」の発想になること。そして、④適応できない人のみが配慮の対象になるのではなく、全ての人が楽しく、心地よく参加できるようにルールや用具を工夫してスポーツの「個人化」を図った状態が「インクルージョン」であり、そこではユニバーサルなスポーツが展開されます。このような金山先生の丁寧な解説により、「各人の多様性を生かした状態がインクルージョンである」ということが参加者に強く受けとめられました。

当日は、障害のある当事者や障害者のご家族の参加があり、質疑を通しては、スポーツを通じたインクルーシブ

ブ（包摂）社会を考える機会になったと思います。また、若い参加者からは、「障害者に対する健常者の意識改革として、果たしてパラスポーツの高度化のみが有効な手段であるのかを考えてみたい」という発展的な感想が述べられました。聴講者 65 名でした。

25 日は、「平和創造に向けたスポーツの役割とは何か：ノルベルト・エリアスの『文明化の過程論』からのアプローチ」について、市井吉興当館副館長が担当されました。まず、講座は、日本のトップスポーツ界で相次いで発生したスポーツ・ハラスメントについて、ハラスメントを起こした指導者への批判に陥りがちな議論状況に注意を促しながら、スポーツ社会学における逸脱論を用いた分析がなされました。逸脱論を用いた分析をすることによって、スポーツ・ハラスメントが、選手や指導者が勝利至上主義に過剰に同調し、勝利のために自己犠牲的な態度を取ることが称賛されるという矛盾のなかで生じていることが指摘されました。それゆえに、スポーツ・ハラスメントをなくすためには、改めて「スポーツとは何か？」が問われなければならないと市井副館長は指摘されました。そこで、この問いを検討するひとつのアプローチとして、市井副館長はノルベルト・エリアス (1897-1990) というユダヤ系ドイツ人社会学者が提示した「文明化の過程」という概念を用いて、上記のような事項にも触れながら、平和創造に向けたスポーツの多様な役割を提示されました。

まず、エリアスがスポーツを分析するさい、近代スポーツ誕生の地であるイギリス国内の社会的対立の回避を目指した議会制度の確立に注目します。つまり、議会制度とは、社会的対立を解消する「和解の場」であり、それを維持するためには、暴力に対する嫌悪感を人々が



講演する市井吉興副館長



講演の様子

より強く抱き、また、個々人が自己の感情を抑制することが求められます。まさに、イギリスにおけるスポーツの誕生、つまり「娯楽のスポーツ化」とは、議会制度の確立と安定化と並行して進展してきました。社会的対立の回避のための「和解の場」の確立とスポーツの誕生。一見すると、無関係に思われますが、この点にこそ、現代が抱えるスポーツの矛盾を解く「鍵」があるのかもしれません。

つぎに、平和創造とスポーツについて、市井副館長は IOC が国際連合と共同で取り組むオリンピック停戦、FIFA がユニセフと共同してスポーツ用品生産現場での児童労働を禁止する取り組み、平和構築と紛争予防・解決、健康増進・健康予防と疾病対策と関連づけた開発途上国支援におけるスポーツの役割を紹介しました。さらに、2020 年に開催される東京オリンピックの追加競技となったサーフィン、スケートボード、フリークライミングといったエクストリームスポーツを通じた若者の社会参加を支援する NPO、ホームレスの社会参加を支援するホームレスワールドカップ（2003 年から開始されたホームレスが参加するフットサルの世界大会）といった、スポーツが生み出す多様な平和創造の取り組みが紹介されました。聴講者は 78 名でした。

記憶のうまれるとき、 語りがつむがれるところ

鈴木岳海

(国際平和ミュージアム運営委員 / 映像学部教授)

「モノが語る戦争の記憶」について

もう5年も前のことになりますが、2013年11月、学徒出陣70年を期して国際平和ミュージアムにおいて「モノが語る戦争の記憶」展示が公開されました。そこでは1943年に京都帝国大学から学徒出陣し武山海兵団の予備学生となった岩井忠熊氏（立命館大学名誉教授・日本近代史）が寄贈した「作業日誌」と、当時の様子を語った記録が2〜3分程度の映像9本にまとめられ上映されました。その映像は、大きく分けて京都帝国大学の学生時代から学徒出陣にいたるまでと特攻隊へ志願する軍隊生活という2つの期間と、「作業日誌」をあらためて手にしてその当時の海軍教育についての証言の記録になります。

学生時代から学徒出陣の期間に関わっては、大学生生活とくに入隊前の心境と学徒出陣壮行式の様子、そしてその際に聞いた忘れられない言葉について語られました。軍隊生活がはじめてから特攻隊に志願するに至っては、「作業日誌」に記載された内容から当時の軍隊生活や、「修正」といったつらい日々の生活について、さらに特攻隊に志願した経緯が話されました。また「作業日誌」に記された内容や日誌そのものを手にして、日誌が残された経緯とその当時の気持ちが述べられました。とくに「作業日誌」を作成するにあたってはその時の率直な気持ちを書くというよりも、教育する側から点検されることを念頭においた内容を記したことなどが語られました。

私は、兼清順子氏（国際平和ミュージアム学芸員）と郡航氏（当時立命館大学映像研究科修士1回生）とともにこの映像記録作成に関わり、岩井氏の記憶が想起される現場、とくに「もの」と「場」によって岩井氏が当時の状況や現在のありようを語る機会をともにすることができました。そこで、あらためて岩井氏の戦争証言を映像で記録するさいに記憶が想起され、語りがうまれたその時について振り返ってみたいと思います。

映像記録にいたる経緯

私は立命館大学映像学部において映像人類学を専門とする教員として、京滋阪神地域をはじめネパールにおける祭りや成人儀礼などの伝統的な年中行事について比較調査やライフストーリーの映像記録や身体技法に関わる映像作品の制作をおこなってきました。国際平和ミュージアムとのつながりについては、映像学部の1回生の授業における平和学習の一環としてミュージアムに学生を引率しその際に展示をみることや、「世界報道写真展」などの写真展を観覧するにとどまっていた。

そのようななか、2012年の7月、国際平和ミュージアムの学芸員である兼清氏から「モノが語る戦争の記憶」プロジェクトについて、戦争体験の証言を残すにあたり展示された資料に対してリアリティを付与する試みとして、資料を手に証言する記録映像の作成に関わるお話をいただきました。なかでも博物館がもつ機能である歴史の継承について、資料を証拠品として、また証言を根拠とする一方で、展示資料と映像を媒介として、来館者が「もの」を寄贈した戦争体験者の記憶を共有できないかという目的に、私がこれまでにおこなってきたことと重なる部分があると感じました。とくに「もの」を扱う人を中心とするだけではなく、「もの」を中心においた記録をおこなってきた映像人類学の視点と方法論を活かす機会として映像の監修を担当させていただき、また立命館大学映像研究科の大学院生に対して撮影や編集技術の向上に関わる教育的側面から協力させていただくことになりました。

撮影現場にて～京都大学農学部グラウンド～

岩井氏の戦争に関わる証言を記録するにあたっては、当初、岩井氏の背景に関してはご自宅で聞き取りをおこない、展示資料を手にした証言についてはミュージアムで撮影をおこなうといったことが予定されていました。また証言記録以外にも資料の写真撮影や翻刻、岩井氏の家族や軍歴、その後の経歴などの背景や、岩井氏の戦争体験に関わる書籍や記録をまとめることとしました。その過程で、「もの」に関わる証言とともに、記憶を想起させる試みとして、「場」における証言の記録もすることにしました。具体的には、岩井氏の戦争体験としておおきな位置を占める京都帝国大学における入隊前の学生生活と学徒出陣壮行式がおこなわれた「場」である現在の京都大学農学部グラウンドにて当時の様子について証言いただくことになりました。

天気もよく肌寒いこともない9月の平日の午前中、農学部グラウンドに岩井氏、兼清氏、郡氏と私が集合しました。わたしたち

の目の前のグラウンドでは、女子ラクロスチームが練習をしています。

岩井氏は、かつてあった銃器庫に保管されていた銃を手にグラウンドで軍事教練をおこなったことやその際の軍事教官の態度などを話されました。また学徒出陣についての話を伺うなかでは、軍事教練のときの服装（角帽に黒い学生服、ゲートル巻き、革靴）のことや、歓送会の際にグラウンドを行進し観閲台のようなものに立つ国民服を着た当時の総長に対して顔を向けて敬礼したこと、総長の挨拶、学内を正門までぐるっと歩きその沿道に当時の在学生たちが集まって拍手して送ってくれたこと、そのあと平安神宮まで歩きお祓いを受けたことなどを次々と思い出されていました。

学生同士のやり取りについても、グラウンドとその周囲を眺めることで記憶が浮かび上がるように、徴兵されることが決まった学生同士が入隊するであろう今後のことについてさまざまな情報交換をしていたことや、せっかく大学に来て勉強しようというのに入隊しないといけないのかとぼやいていたこと、入隊前には軍人勅諭を暗唱できるようになっておかないと選別されるといった現実的なアドバイスなどが交わされたこと、一種の楽しみとして（行く必要のない）大学に来ていたことなど当時の学生の営みがわかる話もつづけて出てきました。さらに当時の文学部の歓送会で、教員があつまり挨拶を述べたこと、なかでもおおくの教員たちが「武運長久を祈る」というようなことを言ったなかでドイツ文学の成瀬清氏が、生きて帰ってまた大学で勉強なさいと公の席で言えるぎりぎりの挨拶をされたことを印象深く語られました。

このほかにも、話題は京都時代より前にさかのぼり旧制中学時代の厳しい軍国主義教育について、旧制中学を出て京都に来る前に浪人時代を過ごした東京での自由を謳歌した日々の語り、大学生生活に戻り田邊元氏の哲学概論の授業についての話、山形県に徴兵検査に行ったこと、大連で映画女優に遭遇した話など、語りに質問をはさみながら話題は飛び、ひとつの記憶が次の記憶を呼び起こすように対話がなされていきました。

そのとき、その場所でうまれた記憶と語り

岩井氏の証言は、私たちの質問を受けて岩井氏が記憶を語るものでした。そこでは確かに質問とその答えという形式になっている部分も見られます。しかし、岩井氏の語りは、記憶からまたちがう記憶へとジャンプし、ときにより深く記憶をたどりながらさまざまなことを語るものでした。岩井氏が想起する記憶の変遷を聞き手である私たちがともに巡っているようでした。まさにこの

日、岩井氏が語られた言葉は、話し手である岩井氏と聞き手である私たちの相互作用をとおして、そのとき、その場所で生み出されたものでした。

またそのときに立ちあらわれた岩井氏の記憶と言葉は、話し手と聞き手の相互作用にくわえて、軍事教練や学徒出陣壮行式がおこなわれたその場所にいるからこそ生み出されたものと言えるでしょう。ことに「場」が岩井氏に記憶を想起させた影響は、私たちがインタビューを終えグラウンドを離れようとするまさにそのときにあらわれました。そのときその場で岩井氏が発した言葉を紹介し、結びにしたいと思います。

「ああいう戦争いったとき、ゲートル巻いて、男の学生服着た、集まっていた場所でね、女子の学生がああいうスポーツをやっているという時代の変化というものを、もちろんあそこ女子学生っていませんしね。やっぱり一種の感慨がありますね。やっぱりこれでこれだけ僕は、日本の市民社会って変わったんだというのが自分の持論なんです。」



京都大学農学部グラウンドにて（映像記録より）

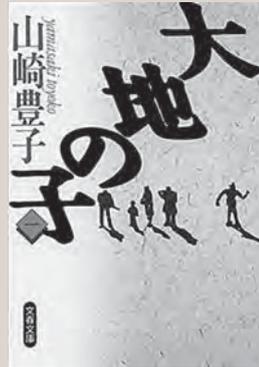
参考文献

桜井厚（2002）『インタビューの社会学』せりか書房

『大地の子』（全4巻）

山崎 豊子 著

文春文庫刊 1994 年



私事になりますが、私の父方の祖父は広島原爆が原因で亡くなったと思われます。「思われます」というのは、戦後の混乱の中で十分な検査もできなかったためです。当時一家は神戸に住んでいましたが空襲により焼け出され、父は大けがを負いました。この時のけがで父の右足くるぶしは変形しており、背中には大きな傷跡が残っています。祖母は子供たちを連れ、実家のある宮島に疎開しました。祖父は一人神戸に残り仕事をしていましたが、夏休みをとって家族に会うため列車で広島に向かいました。8月6日、原爆は投下され、祖父の乗った列車は広島の手前で止まったようですが、家族が心配な祖父は列車を降り、徒歩で宮島へ向かいました。宮島の祖母の実家に着いた祖父は、黒い雨を浴びて真っ黒だったそうです。戦後すぐに体調を崩し、間もなく亡くなりました。母も広島出身のため子供のころはお盆には母の実家に帰省したり、祖母の親せき宅を訪れたりしていましたが、その際何度も広島平和記念資料館を訪れました。まだ幼稚園に入る前の記憶だと思うのですが、皮膚が焼けただれた人形の展示が子供心にとても恐ろしく、未だに忘れることができません。

私は現代中国経済を研究していますが、中国を研究するものとして、また大学で学生を教育するもの一人として、戦争の歴史を自分自身がどう考え、話すのか、いつも悩みながら試行錯誤の繰り返しです。特に加害者としての日本をどう語るのか。中国研究を目指して以降、何度も中国を訪問し、その中で戦争の歴史を展示する博物館や資料館も訪問しました。大学院生時代に訪れた重慶では、日本の爆撃についての写真資料の展示を見る機会がありました。知識としては爆撃のことを知っていましたが、実際に現地写真資料を見た時、小さなころから父や祖母から聞いていた空襲の話が思い出され、日本は多くの方が戦争により大きな被害を受ける一方、加害者としての側面もあるのだと改めて思い知らされました。

今回私は二冊の本を取り上げたいと思います。一冊目は『大地の子』です。この本はNHKでドラマ化され、山崎豊子氏の作品の中でもとりわけ有名な一冊です。私が紹介するまでもない本ではあるのですが、上記のように学生へどう伝えるべきかを思い悩む中で、改めて若い世代の人たちに読んでもらいたい

『二つの祖国』（全3巻）

山崎 豊子 著

新潮文庫刊 2009 年



一冊です。主人公、陸一心は中国残留孤児として、中国の両親に愛情深く育てられます。しかし、中国の政治混乱の中で侵略者日本人の子として迫害を受け、理不尽な仕打ちを受けます。彼自身も戦争の被害者であるにも関わらず、加害者の子として、中国と日本、二つの国の間で翻弄されますが、その中でも懸命に生きる姿が描かれています。二冊目が同じく山崎豊子氏の『二つの祖国』です。本書では、アメリカで生まれた日系二世としての苦悩が描かれています。アメリカで生まれ育ちながらも、日本人としての血を引く主人公。兄弟も米軍として出兵するもの、日本で教育を受け日本陸軍として出征するもの、そして自身も米軍語学将校となるなど複雑な立場に置かれます。戦争により家族は引き裂かれ、自分のアイデンティティ、そして祖国とは何なのかを問われます。

戦争は言うまでもなく多くの命を奪い、生活を奪います。戦後、私たちは戦争の恐ろしさと愚かさを学んできました。しかし、加害者としての日本の歴史は国内ではあまり多く語られてこなかったように感じています。戦争を経験された世代も高齢化し、戦争の恐ろしさを直接聞く機会も減ってきています。本書を読むことで改めて特に若い世代に、私たち日本には加害者の側面もあること、そして実際にその立場に苦しみ、苦悩した人がいることを知ってもらいたい。グローバル化が進展する昨今、多くの日本人が海外で働き、多くの外国人が日本で暮らしています。国際結婚で複数の国・民族のルーツを持つ人も増えています。この二冊の主人公たちの立場は、決して特殊なものではありません。ダイバーシティが叫ばれ、社会が多様化する一方で、ナショナリズムの台頭、トランプ政権をはじめとする保護主義が世界で懸念されています。今でも世界では対立や紛争、戦争が起こっています。非寛容な立場や考えが広がりつつある現在、私たちは、多様な社会を構成する一人として、国、民族、そして対立や紛争について考え続けていかなければなりません。この二冊は、戦争とは何なのかを考えるとともに、国・民族とは何なのかも考えさせられます。

高屋和子

(国際平和ミュージアム運営委員 / 経済学部教授)

ミニ企画展示

第116回

ミュージアムこの1てん「ガマ（壕のくらし）」

会期：2018年6月2日（土）～7月1日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

6月23日は、沖縄県制定の慰霊の日です。これにあわせ、2016年度に当館へ寄贈された奥田豊氏旧蔵コレクションから、儀間比呂志氏（1923-2017）が沖縄戦を描いた版画を展示しました。

ガマとは沖縄に点在する鍾乳洞や自然洞穴のことで、沖縄戦では日本軍の司令部や陣地、野戦病院、住民の避難壕として使われました。県民の12万人以上が犠牲となり、50万人以上が巻き込まれた戦闘では、逃げ場を失った人々がガマへ避難しました。しかし、ガマの中は十分な食料や医療品がなく、日本軍兵士に追い出されることもあり決して安全な避難場所とは言えませんでした。

沖縄出身の儀間氏は、1970年代に『沖縄県史』の住民証言記録と出会い沖縄戦の悲劇と人々の苦しみや痛みを知ったことから、住民の視点に立った沖縄戦の実相を表現した版画を精力的に制作しました。

展示をとおして、旧蔵者奥田氏と作者儀間氏の沖縄戦への思いを受けとめ、あらためて平和について考える機会となりました。



第117回

「外山重男—ある兵士の日常II」

会期：2018年7月14日（土）～8月26日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

協力：嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学

京都・大学ミュージアム連携

通信兵として日中戦争に従軍した外山重男氏（1910-1972）は、戦地から家族のもとに200通以上の軍事郵便はがきを送りました。はがきに添えられたスケッチには、通信線を敷設する兵士や戦火で破壊された農家など戦闘を思わせるものの他、休憩する兵士や大陸の自然など多様な光景が描かれていました。

本展では、家族が戦時中から大切に保管してきたはがきと、戦後に外山氏がはがきをもとに描き直した水彩画を展示し、戦地ではがきを「描くこと」、「記すこと」、それらを家族に託し「残すこと」から、ひとりの人間がどのように戦争に向き合っていたのかを紹介しました。

なお本展は、2017年10月に嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学で開催された展示資料に、新たに提供いただいた資料、家族へのインタビュー映像を加えて構成しました。

また、本展は2018年度博物館実習の実習生が展示設営・インタビュー動画編集などを担当しました。



第118回

写真展「原発とたたかうトルコの人々 —日本の原発輸出、現地の声は?—」

会期：2018年9月11日（火）～9月30日（日）

主催：森山拓也

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

協力：ノーニュークス・アジア・フォーラム ジャパン

世界では、原発依存から再生可能エネルギーへの切り替えが活発化しています。日本でも、福島第一原子力発電所事故を受けて、益々原発の是非が問われています。そのような中、日本政府は原発を安全性が保障されれば有用なエネルギーであると、外国への原発輸出に積極的です。本展では、日本の原発の売り込み先のひとつであるトルコで起きている反原発運動の様子を紹介しました。

チェルノブイリ原発事故の汚染被害を経験したトルコでは、1970年代から反原発運動が続いています。一方で、政府は2023年までに国内電力需要の5%を原発で賄う計画を発表し、それに対する反対運動が積極的に行われています。展示は、歌やパフォーマンスなどで若者を取り込みながら闘う人々の姿を、森山氏が撮影した写真や動画と現地で取材した内容で構成しました。世界各地で起こっている原発に反対する市民の声と、日本の原発輸出という問題に注目するきっかけとなりました。



夏休みこども企画「へいわ」ってなに？ ー今、わたしにできることー 災害から身をまもる編

日 時：2018年7月28日（土）13：00～15：30

参加者：29名

「夏休みこども企画『へいわ』ってなに？ー今、わたしにできることー災害から身をまもる編」を開催しました。親子連れ29名の参加がありました。

はじめに絹川浩敏副館長による平和に関する言葉の意味や災害と戦争の共通点についてのお話がありました。つづいて本学歴史都市防災研究所による「クイズでまなぶ防災」では、クイ



歴史都市防災研究所による「クイズでまなぶ防災」

ズや防災ビンゴに親子で一緒に取り組んでいただき、防災について学びました。その後、館内をめぐるスタンプラリーで見学していただき、学生スタッフから食料問題などについての解説をうけました。

保護者の方からは、「災害がつづいている今こそ、平穏な生活のありがたさを感じました。ここで学んだことをしっかり家の備えとして実践したいです。」「親子で防災に対する意識を高めることができました。娘もとてもよい勉強になったと思います。」などの感想をいただきました。

お子様からは「平和とは、いろんな国、いろんな人のちがいをみとめて、どんな人の意見を聞いたり、言ったりして、世界の人が仲がよかったり、自分を守って楽しく過せたりすることだと思います。」などの平和へのメッセージが寄せられました。



館内スタンプラリー

教員向け見学説明会 2018

日 時：2018年7月25日（水）・26日（木）・27日（金）

8月21日（火）・22日（水）・23日（木）

開催時間：13：00～15：00

参加者：20校 53名

内 容：

安齋育郎名誉館長による国際平和ミュージアム概要・活用法、平和学の講義

展示見学（ボランティアガイドの解説あり）

収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての利活用と貸出教材キットの紹介

個別相談（見学受付、各種サービスの案内）



安齋名誉館長の講義の様子

小・中学校の団体見学についての教員向け見学説明会では20校53名の先生方にご参加いただきました。

安齋名誉館長は、現代の平和学における平和の考え方、そして国際平和ミュージアムの学校における活用についてお話をされました。

展示見学ではボランティアガイドの案内や平和創造展示室での学生スタッフによる「戦争がなければ平和でしょうか？」という問いかけから始まる解説を体験していただきました。また、学芸員が平和教育に活用していただける貸出教材キットを紹介しました。

当日参加された先生方からは「ボランティアガイドの方や学生スタッフの実際の説明を体験でき、イメージが沸いた」「子どもたちにどのようなことをみさせ、考えさせると良いのが、はっきりとしました。」といった感想が寄せられました。



学生スタッフによる解説（平和創造展示室）

平和へのメッセージ

常設展示見学者の感想（2017年4月1日～2018年8月8日）

とても見やすく、戦争を体験したこと
の無い僕が見ても戦争の危なさ等が伝
わってきて、これからは平和について
もっと考えようと思うようになりました。

中学生 兵庫県 10代

色々わかって、戦争は怖いと本当にわ
かったし、ごはんを毎日食べられない
人もいるのだと思った。

小学生 三重県 10代

音声や実物があっておもしろかった。
体験する物を増やしたらあきないと思
います。

小学生 大阪府 10代

ミュージアムを見てあらためて平和であ
ることが幸せであることに気づきまし
た。戦争をしてもなにも変わらない。た
だ一度きりの人生をむだにただけだと
思う。これからも幸せにすこせるよう
に平和を守っていきたい。

中学生 滋賀県 10代

家や人が再現されていてよかった。写
真や資料がたくさんあって戦争の悲惨
さがよくわかった。また、所々に映像
を見るところがあり、すごくよくわ
かった。戦争はもう二度と繰り返して
はいけないと思った。

中学生 奈良県 10代

わたしは、沖縄から来て、平和学習とい
うことでここに来て、沖縄戦や広島原爆
や色々なことが、ここにあって、色々な
ことが分かりました。わたしは、もう1
度ここに来てみたいです。二度と戦争が
おきないようにしたいです。これ以上、
人を苦しませないように戦争をやろうと
している人を、止めようと思います。こ
こに来て、京都でおこったこととかも知
ることができたので、よかったです。
色々教えてくれてありがとうございます。
分からないことやわたしたちがいる
ところに来て、そのことについて教えて
くれた人たちの説明もとても分かりやす
かったです。本当にありがとうございます。

小学生 沖縄県 10代

前から、戦争は怖いことだと知っていた
けど、あらためて勉強したらもっと怖い
ものだと思います。こんなにも苦しん
でいる人がいるのに自分は、なにもでき
なかったことが、とても辛いです。すこ
く泣きそうになりました…大きくなっ
たらお金をためて、貧しい人に寄付した
いと思います。一つ気づいたのが、人は何
か一つを敵にまわさないとだめだとい
うことです。だれも傷つけてはいけないと
いうことができない生き物なんだなあ
と思いました。人は、人を生んだのに、そ
の人が人を傷つけるなんて、とても辛い
ことです。ぜったいとまらないループの
はじまり。もしそれが、とめられるなら、
それはキセキですね。でも、戦争や
争いがなくなることはなくても、自分は
減らすことはできると思うので、そのた
めがんばりたいと思います。今日、こ
のことについて勉強できたことが、とて
も嬉しいことだと思います。戦争が、
この世界から、少しでもなくなることを
願っています。また、次、大きくなった
時に、あらためて、ここに来たいです。

小学生 大阪府 10代

高校1年生の頃に「永遠の0」という映
画を見て、戦争というものに興味をもち
ました。今まで、戦争という「怖い」・
「やってはいけないものだ」という
印象しかありませんでしたが、興味を持
ちはじめてから、様々な資料を目にして
いく内に「怖い」、「やってはいけないも
のだ」ということはもちろん、そのよう
な現状の中でも人々は生きようとして
いるということを知りました。今、日本で
毎日平和に暮らしているのは、先人た
ちが築きあげてくれたものが今世に残っ
ているからではないでしょうか。たくさん
の写真を見てきた中で、中には残酷な物
も多くありましたが、私が最後に記憶に
残ったのは、子どもたちの笑顔でした。
きっと、この子どもたちは、戦争とい
うものがどんなものかよく知らないと思
いますが、子どもたちが戦争と関らない生
活をさせてあげることが私たちの役割だ
と感じました。

大学生 大阪府 20代

戦争中にどんなことがあったのかや、
どんな被害があったのかについて詳しく
知ることができた。同じことを繰り返
さないために、自分になにができる
のかこれから考えていきたい。実際
に入ったり持ち上げたりできる物があ
ったので、より詳しく戦争中の様子を知
ることができた。沖縄が差別されてい
て、多くの人が亡くなってしまったこ
とが印象に残っている。そのような差
別をなくすために、まずは自分が差別
をしないようにしたい。

中学生 京都府 10代

※掲載にあたり一部の表現を改めました

Working for Kyoto Museum for World Peace

学生スタッフのしごと 04

メディア資料室の学生スタッフの仕事は、利用者へのレファレンスサービスや国際平和ミュージアムの収蔵資料データベース「Peace Archives」のデータ登録・整理作業など多岐にわたっていますが、最も重要な作業は、資料整理です。

ミュージアムは膨大な資料を所蔵しており、資料の種類は書籍、書簡、金属製品、布製品と多岐にわたっています。その資料がどのような資料か、いつ頃のものか、状態はどうなっているかを記録することは、資料の保存・活用に欠かせません。

今回は、その作業の手順を説明することで、学生スタッフの仕事を知っていただければと思います。

ミュージアムに資料が寄贈・寄託されると、資料を管理する番号や名称が決まります。ここから詳細な情報を「資料カード」に記入することが私たちの仕事です。まず、資料の寸法を測り、破損状態やカビ、シミなどの虫害の状態を確認し、被害がある場合はその状態をスケッチし、カードを見ただけで資料の状態を把握できるようにします。

次に、資料の年代や概要を記入していきます。書簡を例に挙げると、差出人や受取人、簡単な内容、消印や検閲印の有無などを記入します。また、資料に年代が明確に書いていない場

合がほとんどなので、内容や消印などから年代を推定することもあります。これらの工程が終了すると、資料を撮影し、撮影した画像を「資料カード」に印刷し、「Peace Archives」にアップロードします。その後、別の学生スタッフがカードを点検し、問題なければ「Peace Archives」にカードの情報を入力し、収蔵場所に収納されます。

以上が、私たち学生スタッフがやっている資料整理の作業になります。この作業は、ミュージアムが提供する様々なサービスの基盤になっています。また、100年前の社会や人々の想いを感じることができ、責任感とともにやりがいもある作業です。メディア資料室には様々な図書資料やAV資料もありますので、来館された際はぜひ、メディア資料室に足を運んでいただければ幸いです。(木村恭子)



資料整理の様子

入館者状況 (2018年4月～2018年9月)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	
開館日数	25	27	26	24	25	19	—	—	—	—	—	—	146	
入館者数	1,903	4,418	3,562	1,863	2,163	1,672	—	—	—	—	—	—	15,581	
累計 (開館当初からの入館者数)													1,084,869	
特別展	4/14～7/16 春季特別展 「ヤズディの祈り—林典子写真展—」												10,085	
ミニ企画展示	4/1～4/22 第114回 熟覧III—メディア資料室の誘い—	4/28～5/20 第115回 私のレンズを通して見た、占領下のパレスチナ	6/2～7/1 第116回 ミュージアム・この1でん「ガマ(塚のくらし)」	7/14～8/26 第117回 外山重男—ある兵士の日常II—	9/11～9/30 第118回 写真展「原発とたたかうトルコの人々—日本の原発輸出、現地の声は?—」								—	
講演会ほか	4/14 春季特別展「ヤズディの祈り—林典子写真展—」関連企画 ・オープニングイベント「林典子トーク」 登壇者：林典子氏(フォトジャーナリスト) 対談：竹中悠美氏(立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)													61
	6/2 講演会「人道支援で出会ったヤズディの人たち」 講師：佐藤 真紀氏(JIM-NET事務局長) / 平井嘉一郎記念図書館1階カンファレンスルーム													32
	6/19、21 映画上映会「ラジオ・コパニ」 / 充光館 JK001													77
	5/2 映画上映会「憲法を武器として—一家庭事件 知られざる50年目の真実」&ゲスト対談 / 創思館 SO101 対談：稲塚秀孝氏(映画監督) 内藤功(弁護士) 進行：君島東彦(立命館大学国際関係学部教授)													170
	5/18 科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第7回ワークショップ「『声なき声』を聞き伝える—沖繩戦の遺品ヒアリングの現場から」													8
	6/22 科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第8回ワークショップ「継承の力学—広島における『被爆体験』の遺産化とその影響」													9
	6/29 前期 NGO ワークショップ「世界の子どもたちにとっての平和とは?」 講師：加藤真希氏(日本国際ボランティアセンター<JVC>職員)													40
	7/25～ 教員向け見学説明会(6日間・7/25、7/26、7/27、8/21、8/22、8/23)													53
	7/27 メディア資料研究会 第9回「フィリピンの人権問題の記録について—横山静雄元中将資料を中心に」 講師：永井均氏(広島市立大学教授)													13
	7/28 夏休み子ども企画「へいわ」ってなに?—今、わたしにできること— 災害から身をまもる 編													29
	7/29 科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第9回ワークショップ「レプリカ交響曲」 発表者：土屋大輔氏													12
	7/31～8/5 平成30年茨木市非核平和展—戦争を知らない世代へのメッセージ—(協力) / 茨木市立中央図書館													1,557
	7/31～8/5 第38回平和のための京都の戦争展 主催：平和のための京都の戦争展実行委員会													2,685
	8/2 キューバプログラム支援 事前学習会 立命館土曜講座													8
	8/4 ・パラリンピックと障害者スポーツ：傷軍人へのリハビリテーションを起源とするパラリンピックから障害者の福祉を紐解く 講師：金山千広氏(立命館大学産業社会学部教授) / 末川記念会館													65
	8/25 ・平和創造に向けたスポーツの役割とは何か：ノルベルト・エリアスの「文明化の過程論」からのアプローチ 講師：市井吉興氏(立命館大学産業社会学部教授・国際平和ミュージアム副館長) / 末川記念会館													78
	8/22 自衛隊基地の地域史・社会史プロジェクト第1回研究会「大分県日出生台における軍事演習反対運動の展開—生活世界からの抵抗—」 発表：中島弘二氏(金沢大学准教授) コメント：大野光明氏(滋賀県立大学准教授)													16
	9/8、9 劇「河」京都公演(協力) / 紫明会館3Fホール													321
	9/10 第52回原爆忌全国俳句大会(後援)													45
	9/16 没後10周年加藤周一さんを偲ぶ会(協力)													110

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

今年のノーベル平和賞は紛争下で性暴力と闘う2氏、コンゴ民主共和国のドニ・ムクウェゲ医師(63)と、イラクの少数派ヤズディ教徒の権利擁護を訴えてきた活動家のナディア・ムラド氏(25)が受賞しました。当館では春季特別展として「ヤズディの祈り—林典子写真展—」を開催し、写真を通してヤズディ教徒の抱える悲しみと怒りが多く伝わったと思います。10月には「世界報道写真展2018」を開催し、日常のニュース報道では伝わらない世界の「いま」を写真を通して伝えており、改めて「写真のもつ力」「写真の役割」を感じました。そして、立命館大学国際平和ミュージアムの役割、「平和創造の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、平和創造の主体者をはくくむ」ために何をすべきかを考えます。今次受賞のお二人の勇気を称えとともに、今なお紛争による被害に苦しむ人々が一日も早く苦しみから解放される日がくることを祈念いたします。(編集部)

INFORMATION

ミニ企画展示

第120回

「わたしたちも撮りたい！～ネワールのひとびとがみる生活文化～」

会期：2019年1月17日（木）～1月31日（木）

主催：鈴木岳海（立命館大学映像学部教授）

展示内容：これまでカメラを手にすることがほとんどなかったネパール・カトマンズ盆地で生活するネワール族の高齢者たち。「わたしたちも撮りたい！」と、身のまわりのひとやものにカメラを向けて日々の生活を撮影した写真を通して、ネワール族の暮らしを紹介します。



ネワールのひとびとが撮影した写真

第121回

第24回京都ミュージアムロード参加企画

「京都青春時代パート3－学生と運動の風景－」

会期：2019年2月9日（土）～3月24日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示内容：京都を舞台に学生の目線から時代をきりとるシリーズ第3弾です。1968年前後の日本では、ベトナム戦争反対、安保闘争、大学紛争など、人々がさまざまな「運動」を通じて声をあげ、社会を動かそうとしました。当時の若者たちの姿を立命館大学に関わる資料から紹介します。



当時を物語る1969年の出版物（館蔵）

2019年度（2019年4月1日）より休館日が月曜日から日曜日になります。

学校単位でのご見学等、月曜日にご予定いただくことが可能になります。

従来どおり祝日の翌日は休館です。

詳細はホームページをご確認ください。

立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド募集説明会

当館の運営・趣旨を理解し、健康でガイド活動に意欲ある方を求めています。ガイド活動のあらましと登録までの流れなど説明いたしますので、ぜひご参加ください。

日 時：2019年1月19日（土）、1月27日（日）13:30～

場 所：国際平和ミュージアム2階会議室

募集人数：5名程度

申込不要・参加無料

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第26巻第2号（通巻75号）2018年11月30日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<http://www.ritsumeiji.ac.jp/mng/er/wp-museum>

